潮来市の誇れる自然 第92回

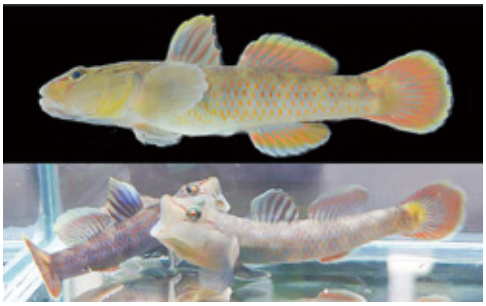
水郷の魚たち ―ヨシノボリ(とおりゴロ)

ヨシノボリという魚をご存知でしょうか。令和6年度、文化庁の「伝統の100年フード」に霞ヶ浦・北浦の魚介類食文化が認定され、水郷名産の佃煮が注目されています。そのうちの一つ、「ゴロの佃煮」の材料はゴロと呼ばれる小型ハゼ類で、このゴロのなかにヨシノボリも含まれています。

ヨシノボリの仲間は日本産だけで現在約20種が知られており、日本中に広く分布しています。霞ヶ浦・北浦とその流入河川・水路にはトウヨシノボリ(写真上)が生息しており、とくに流入河川では最もよくみられる魚の一つです。本種のオスは繁殖期の春に色鮮やかになり(尾ビレ基部の橙色斑が名前の由来)、オス同士で口を大きく開けヒレを広げて威嚇し合います(写真下)。本種は生活史のなかで川と湖を回遊します。卵から生まれた3㎜ほどの仔魚は川を下り、霞ヶ浦・北浦で浮遊生活を経て2㎝ほどの稚魚になり、梅雨頃に川へ一斉に遡上します。その後は川に滞在して成長し、翌年の春に成熟します。

川へ遡上途中のハゼ類の稚魚を、水郷では「とおりゴロ」と呼びます。地元の方から川にたくさんのゴロが遡上するという話を聞いていて、いつかその光景を見てみたいと思っていた矢先の7月上旬、川での調査時に、体長2㎝ほどのヨシノボリ稚魚の群れを見つけました。よく見ると、群れは上流のほうまでずっと続く長い列となり、大蛇のようにうねりながら川を登っていました。彼らの回遊生活の一部である「とおりゴロ」現象を実際に見られたあの瞬間は、今でも鮮明に目に焼き付いています。ただ、地元の方によると、昔はもっとたくさんのゴロが遡上していたそうです。ゴロの漁獲量は過去数十年のうちに激減しています。水郷ならではの食文化を残していくためにも、ゴロの遡上・生息しやすい環境の保全・再生が求められます。

茨城大学 大学院理工学研究科
博士前期課程 加藤 樹音



トウヨシノボリ
生鮮状態の標本(上)と水槽での闘争行動(下)

潮来市の誇れる文化 第151回

大生古墳群の古墳たち

潮来市大生地区にある大生古墳群は、茨城県内でも規模が大きく、大生西古墳群・大生東古墳群・大賀古墳群・釜谷古墳群・水原古墳群に分けられます。このうち大生西古墳群は子子舞塚古墳・鹿見塚古墳といった、大きな前方後円墳が水郷県民の森の中にあるため、見学もしやすく、親しみが感じられるでしょう。

さて今回は、少し分かりにくい場所にある古墳を紹介します。

古墳群内で最大規模の方墳(四角形の古墳)は、再利用され、現在では大生殿神社となっています。ときどき大生神社と間違えて訪問する方もいますので、見学の際はご注意ください。神社の石碑によりますと、江戸時代初期にこの地で善政を敷いた殿様が、大坂冬の陣に出陣する途中で病死したため、方墳の頂上に石碑を建て、その遺訓を守り、殿様を祀ることになったそうです。遺訓により、近隣からの信仰を集め、関係者が代々管理し続けてきたため、方墳の形を現在も維持し続けています。参拝かたがた、方墳の形状や規模を見学できます。

大生東古墳群の私有地には、規模の大きな上円下方墳(上部が丸く下部が四角形の古墳)があります。大生の古墳群における上円下方墳は、この古墳だけだと私は思っています。現在は鬱蒼とした藪になっていて、自生する大木のためか、上円部には損傷が目立ちます。下方部も、残念ながら一部が耕作地として耕されています。

その他にも、千年以上の年月で木々の根や人の手などで侵食されつつ形状を変えようとしている古墳があります。市民の関心と力があれば、潮来市の貴重な文化財を後世に残していける原動力になるのではないかと思います。

潮来市文化財保存審議会 久保 隆

上円下方墳の上部

上円下方墳の下部